

いの流水俳壇

「当季雑詠」

友草 水月選

右膝に鬼を棲せて福は内

井上 郁子

(評)右膝を痛めている作者は少し無理をす
ると痛むのであろう。中高年になると膝痛
を訴える人が多く特に女性に多い。その膝
の痛みは鬼が棲んでいると例え「鬼は外福
は内」と膝の回復を願うての厄払いの豆まき
である。

節分の豆まきと膝痛との取り合わせは切
実である。

○豆を撒く吾がこえ聞へ伸びゆかず

石田 波郷

節分の仕来たり守り事なき日

川村 博子

(評)仕来たりとは昔からやってきた行事や
習慣のこと。作者は今年も節分の習慣を守
り、家族の健康と安全を祈ったのである。た
だ作者の言う「仕来たり」とはどんなこと
であろうか。節分の行事にはいろいろあるが、
守った仕来たりとは具体的にどんなことか
具象性が欲しいと思う。

○豆うたれいる保母の鬼美しき

宮崎 水滴

節分とは季節の変わり目を言い、立春、立
夏、立秋、立冬の4つがある。特に立春の前
日を節分と呼び、鯛の頭、また櫨の木や松
を戸口に供え、炒った大豆を鬼は外、福は内
と投げて邪気を払う古来からの習慣である。
またこの夜、寺や神社では邪気を払い春を
迎える追儺の行事をする。

帆のようにコート吹かれています渚

島村かりん

(評)冬の浜辺を散歩しているのであろう
か、折りからの強い季節風にあおられコー
ト(外套)がまるで帆のように膨らんでいる。
コートは着ているものの寒さが身に染み
ていることだろうと思わせる冬の渚の風景
である。上五の帆のようにとの形容がよく
風景を捉えている。

○外套の淋しさ埠頭に極まれり

古川 歌子

棒杭を揺らしてやまぬ春の水

東谷 晴男

(評)川の中に打たれた木の杭が水の流れ
に当たり揺れ続けている春の川のスケッチ
である。岸辺には野草が萌え小川ののどか
な春の情景を思わす詩である。

どこでも誰もが見ている風景である。揺れ
動く杭がこの句の核であり詩情を高めている。

俳句は特別な場所ではなく折々の自然
の中、生活の中にこそ詩情がある。

○春の水こもこも山を出で来る

三橋 敏雄

二句抄

盆梅を座に設えて土佐の酒
常ならぬ人の世に散る椿かな
老いてなお夢を咲かせし冬桜
ひとり居の声細きかな豆を撒く
冬の霧向かいの家も包みけり
蓄ち我が背にやさし春隣り
早春の風転びゆく千枚田
春時雨人を拒ばぬ自動ドア
ほろ酔いの類にそよ風春の闇
老梅の生きたる証花二輪
あの路地を曲れば蠟梅濃く匂ふ
風花やワイングラス透かしみる

大川 節弥

小野川町子

田蔦恵美子

竹崎 光子

岡村 嘉夫

津田 久美

つま先の凍てて越前竹人形

伊藤 萩甫

しんしんと山しんと咲く梅花

竹崎たかひろ

寒暖のドラマのなかで咲く梅花

片岡 包女

日溜りのきつもとどりつ春を待つ

間 浩太

粉雪を窓に独りの茶をそそぐ

森岡 照月

命名の春馬に夢を抱き上ぐる

井上 郁子

時雨くる標語垂れたる警察署

川村 博子

田水張り棚田にのち戻りけり

島村かりん

畦焼いて豊作願う姉の顔

友草 水月

村の春主が居ない家のひょう

東谷 晴男

彩りの春の和菓子と土産とす

松尾 芭蕉

大ふぐり早大地に根を張れり

山路来て何やらゆかしすみれ草

焼き結を載せたる皿のさざなみ

この句は日本の何処でも見られる山野の景色
である。芭蕉が逢坂峠を経て大津に至る山道を
越えた折の句と言われる。こんな山奥に人知れ
ず咲いているすみれの花を見つけ、その花に「何
やらゆかし」と愛惜をふと思ったのである。

如月の高なる堰の泡の音

人に見られることなく、ひっそりと命を紡ぐ花
「ゆかし」と花への賛辞でもある。人は皆そのよ
うなものに出会い、慰められ勇気づけられて生
きていくのである。芭蕉句の「わび」「さび」とは
一味違うほつとする優しさ、ゆかしさのある作
品である。

皿に添うクレソンの香や春はそこ

名句鑑賞

水月

次 題 「当季雑詠」五句

締め切り 毎月五日

投句先 社会教育課

〒893-1201

いの町3597

吾川郡

TEL (088) 893-0014

有料広告

内科

外科

小児科

循環器内科

消化器内科

リハビリテーション科

人工透析

医療法人
光生会

森木病院

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL (088) 893-0014